

昇降機 Column ①

“地震、雷、火事、親父”考

— 昇降機の「上座、下座」について —

■ コラムニスト、エスカレーター技術研究家 齋藤 忠一



■ 「上座、下座、横座」のこと

〈新年、明けましておめでとうございます〉と挨拶したら、それなりの似たような返事があるのは表題に掲げた4つのうちの人間だけだろう—その他3つには、新年の挨拶などご遠慮申しあげたい。

親父…世の中で怖いもの4点セットのうち“地震、雷、火事”に匹敵するほど“親父”は怖いもの、と言われた時代の言葉とされている。

ここは4つ目の“親父”の前に副詞の「かつて」を置き、辞書 広辞苑の「日常、人々の恐れるものを順に列挙するという語」に従うことにしよう。

親父と言えれば一筆者の子供時代、政治家だった父の指定席は、“横座”と称する「囲炉裏の奥正面。上座、亭主座とも言う」(辞書)であった。そして、囲炉裏の中央には、天井から吊るされた高さ調整式の“自在鉤(かぎ)”と称する竿の真下に鉄瓶と徳利1本…家族もそこを避ける、恐れ多い“指定席”だった記憶があります。

小欄の初回は、昇降機の「上座、下座」について述べてみたいと思う。

■ 昇降機、それぞれの違い

昔、職場の朝礼で「エレベーターの『上座、下座』」の話が出たことがある—その時、教わった正解は「下座(目下)は操作盤の前、上座はその真うしろ」、4人での上座は操作盤に向けて「奥の右が1番、その左が2番、前列左が3番目」という順番。

この場合、下座の人は少し(斜め)に向けて、「上座にお尻を向けないう」に、がおススメ。

こうしたマナーは、タクシー利用時も同じことで、上座は運転手の真うしろ、下座は後部席の左、次が真ん中、その次が助手席という順になる。

一方、ややこしいのはエスカレーターの場合で上り運転はお客様が先、下り運転はお客様があとに乗り込むように案内する—約200mmの段差が分かれ目で、上下方向どちらの場合も、目線が下になる方が下座となる(この利用状態は、上座の人を支え、守る安全上の意味もある、という)。

■ この際、片側歩行も片側空けもやめよう

ここで、世の紳士淑女に是非提案しておきたい。「エスカレーターの階段を歩くかどうか、エスカレーターの片側を空けて乗るかどうか」の議論はもう“オシマイ”に、ということ。

エスカレーターの「上座、下座」論は、人間関係をスムーズに運ぶマナーではありますが、利用者の「安全面での功罪はなし」、階段歩行とか片側空けは「安全上の功罪あり、時に不便、危険をとまなう」大きな違いがあります。

「不便」の方は「肉体的事情で、例えば右手しか使えない人は右側に立って『手すり』をつかむしかない」訳で、「関東は左、関西は右」など関係なし—そうしないと、理想とする「ノーマライゼーション(体が不自由でも普通の生活ができる)社会の考え方」に反してしまう。

また「危険」の点では、「片側立ち」の人に対して無謀にも「どけ!」などの暴言(精神的な苦痛)を吐いたり「ぶつかる」「接触して倒す」など、正しく乗っている人に対して直接的な危害を及ぼす心配があります。

余談ながら、東京駅で東海道新幹線に乗り、新大阪駅に降り立った時の“頭と行動の切り替え”もまたなかなか難しく、ためらうものです。

■ 最後に、最近の“父親”考

この数年、われわれ人間が間借りしている大家の“地球”が何だかおかしい—一年々多発する災害でいったい何人の命を奪えば済むのか…昔と変わらず雷も火事も怖い。妙にやさしくなったのは“親父”だけではなからうか。そんな気がしてならない。

広辞苑に「親父：父親を親しんで呼ぶ言葉」とあるが、子どもの呼び方が「お父さん」から「オヤジ」に変わるまでの数年の間、「おとう」の時期があります。自分は「おい!」とか「〇×」とか呼び捨てにされるのに、父親にだけ「さん」付けは不公平、との反抗心であろうか。

その点、母親はいつまでも「お」や「さん」付けのようであらやましい…普通の呼び方で「おかあさん」、悪くても「おっかあ」か「おふくろ」。

【筆者の紹介】：編集委員会

齋藤忠一氏は、主としてエスカレーターの開発設計を担当された技術者です。

標題の“コラムニスト”については、現在、鉄道系雑誌などに月数本のコラムを連載中。その中の〈筆者紹介〉に「秋田県出身。高校時代、詩集『青春の星』で詩壇デビュー。地方紙の年鑑に『純粋な詩心に期待』と残っています。

同じく“エスカレーター技術研究家”については、当協会委員歴約20年を含む、エスカレーター技術職半世紀ののち、“技術研究家”として多分野で活躍中です。

今後、しばらくの間「昇降機の“雑学”」、特にエスカレーターの「こぼれ話、面白話」について寄稿していただく予定です。ので、ご期待ください。